

重度障害を抱える子と親に とっての8050問題

社会福祉法人東京緑新会 多摩療護園 園長
(東京都自立支援協議会 委員)
平井 寛

1972年旧療護施設制度開始と同時に開設された多摩療護園(所在地*東京都日野市)



1 重い障害を抱える方々の 8050問題は深刻

☆ 障害を抱える子と親の場合「引きこもり、生活困窮」のイメージと違い複合的な課題が多い

(1) 入所問題に絡む様々な課題

- 重度身障の施設入所待機者は毎年ピークで300人、実際の入所は1割ほど
- 重症心身障害児・者の待機者は約600人、知的障害者の待機者は1,000人存在すると言われている

(2) 東京から追われる重度障害者

「身障の場合、支援区分6であっても、支援にかなりの困難性を伴うか、親が高齢、病気等の状況がないと、都内施設に入所推薦する水準に達しない」→そのため、他県施設に入所の方が後を絶たない

……変わったこと、変わらないこと

(3) 平均寿命の延びが変化をもたらした

- ① 30～40年前は親御さんが他界され、兄弟など他の家族が介護をしているか、社会的入院が多かった
- ② 今も昔も、障害を抱える子供を、親の寿命が尽きる直前まで介護するケースはなくなる
- ③ 晩婚化により、今後は少しずつ4080問題に近づく

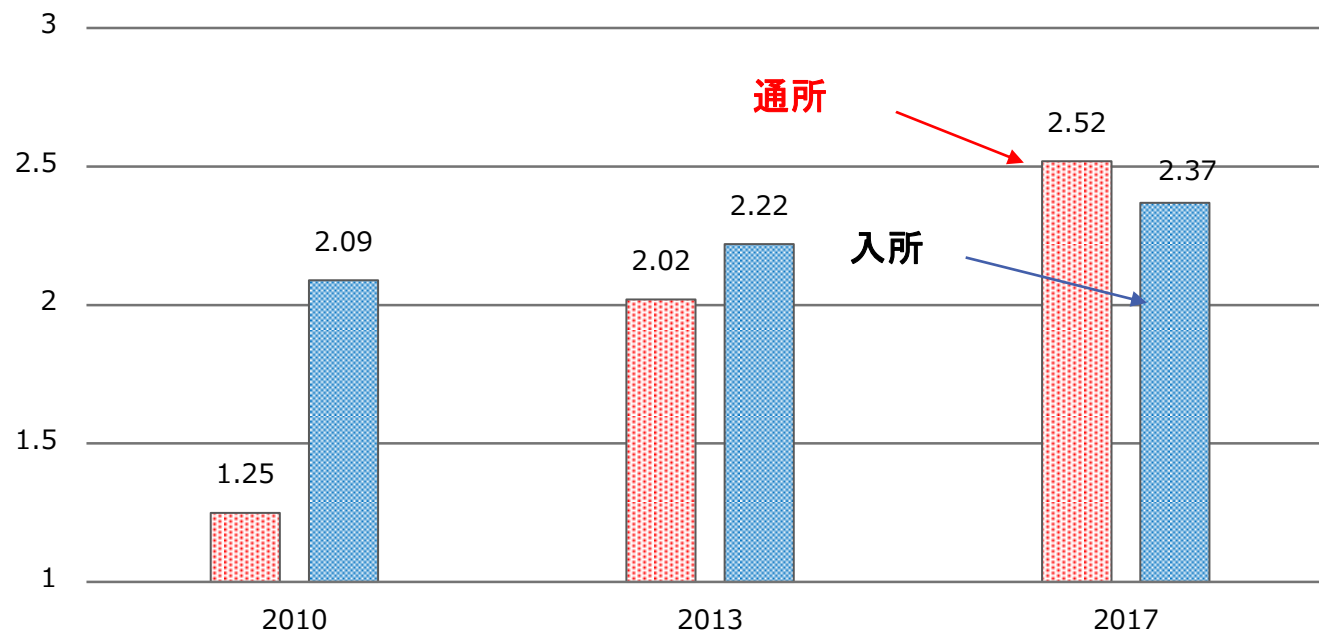
(4) 進む利用者の重度・高齢・病弱化と医療的ケア

「障害種別を越えて重度化が進行し、施設は地域に向けて、さらなるセーフティネット機能の強化が求められている」

地域在宅の困難事態が現れている

表 1 入所と通所の医療的ケア量の動き *急速に伸びた通所者の医療的ケア*

都内療護回答95%：利用者1人当たり医療的ケア指数の推移



主な医療的ケア項目に対して、気管切開からの吸引10点を基準に比較点数表を作成し、入所と通所の医療的ケア量を7年間で3回求めたものです。各年4月1日現在の利用人員が対象(回答率95%)

(東京都身体障害者施設協議会)

医療的ケア量の指数化について

手技は、複数施設で確認した右の主な医療的ケアを対象に、その合計点数を利用者数で割って指数化する

⇒それによって、各施設1人当たりの医療的ケア量が分かり、比較可能という試みである

手技	点数
気管切開からの吸引	10点
人工呼吸器管理	9点
気切を除く鼻腔等吸引	6点
胃ろう等経管栄養	6点
酸素	6.5点
人工肛門パウチ・膀胱ろう等管理	5点
膀胱留置バルーンカテーテル管理	5.5点
導尿全介助	8点

……入所に関する事例について

(5) 様々な理由や思いから入所支援を断ることも

事例1:

「今がベストと入所決定を断る80代両親」

事例2:

「自身の最期まで離れたくなかった母親」

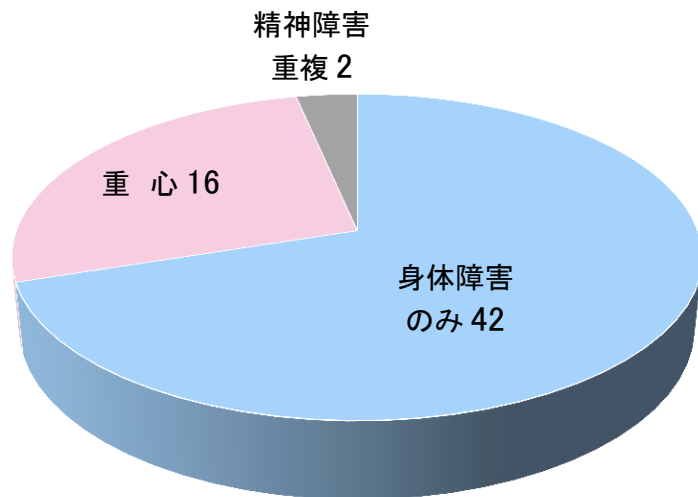
事例3:

「親しか本人を守れないという意識」

2 地域での相談支援 を通じた様々な事例

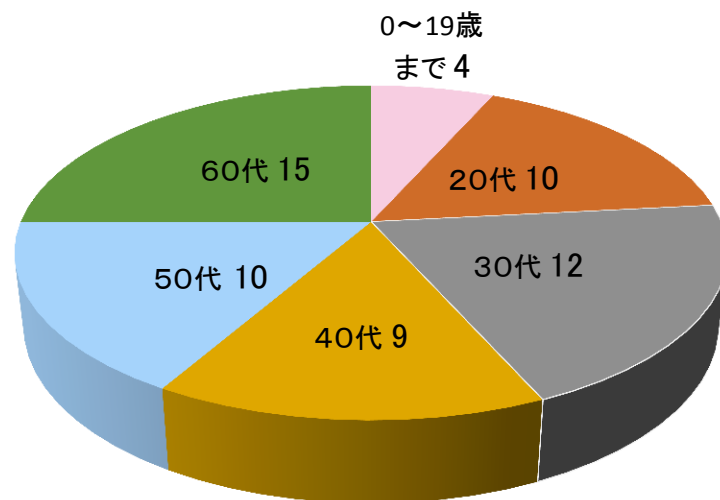
(1) 身体障害(障害・年代)

単位:人



利用者の障害状況

単位:人



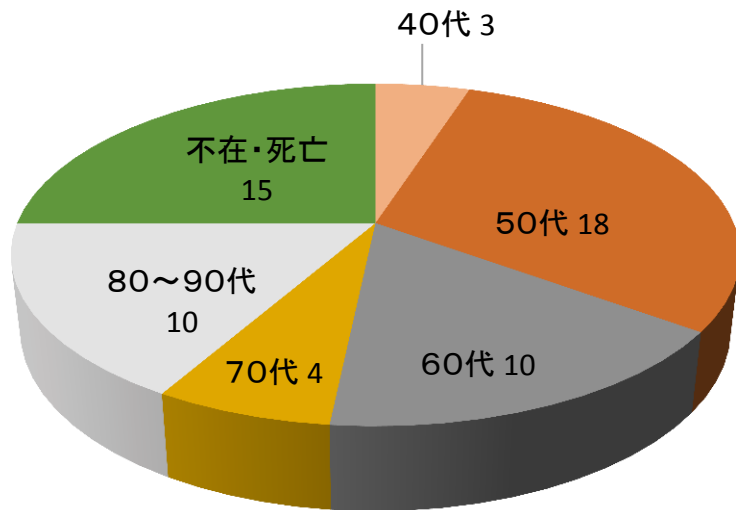
利用者の年代

調査:2017年4月

介護者の年齢層が高くなっている

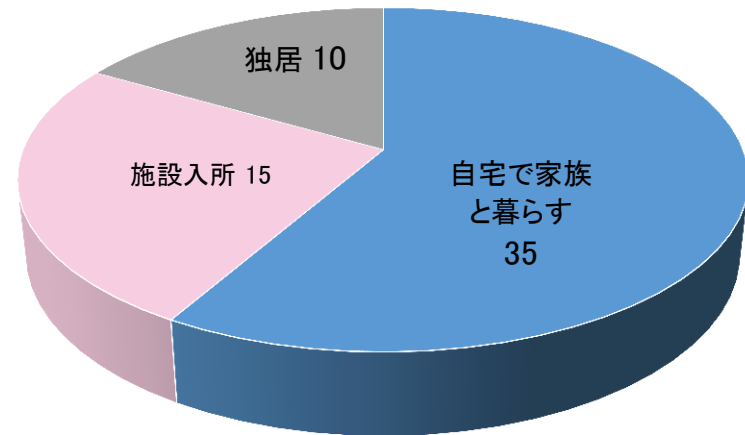
(2) 身体障害(介護者の年代・利用者の居所)

単位:人



介護者の年代

単位:人



利用者の居所

身体障害児・者の相談支援実態例から見えるもの

(3) 身体障害者・計画相談を担当して

※重症心身障害児・者、遷延性意識障害の利用が多い特徴

- 知的障害手帳を持たない身体重複障害児・者が多い
- 重度で0歳児のお子さんへの利用計画が増える傾向にある
- 60代利用者は⇒主たる介護者不在、または死亡が多い
- 家族と暮らす40～50代利用者の介護者は⇒70代で4人
80代8人、90代2人
- 全利用者の母親の出産時平均年齢は31.3歳⇒ほぼ子供が40代後半で80歳に到達

身体障害分野の事例

(4) 身体障害事例

事例1:Aさん

「50代の中途障害者で80代の母親が介助。通所先で異変に気づく」

事例2:Bさん

「70代半ばの在宅酸素を使う母親が主たる介護者」

事例3:Cさん

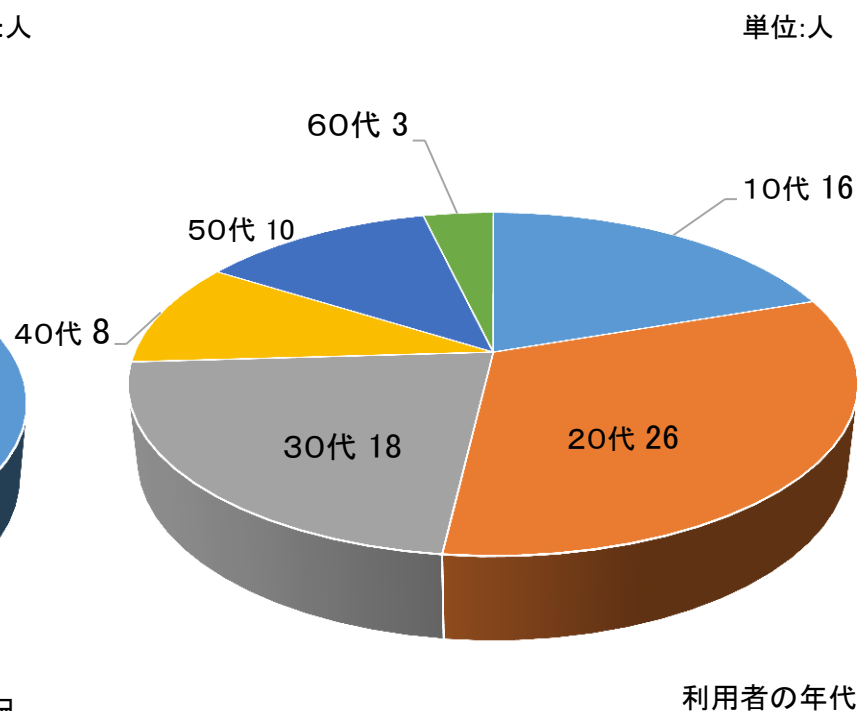
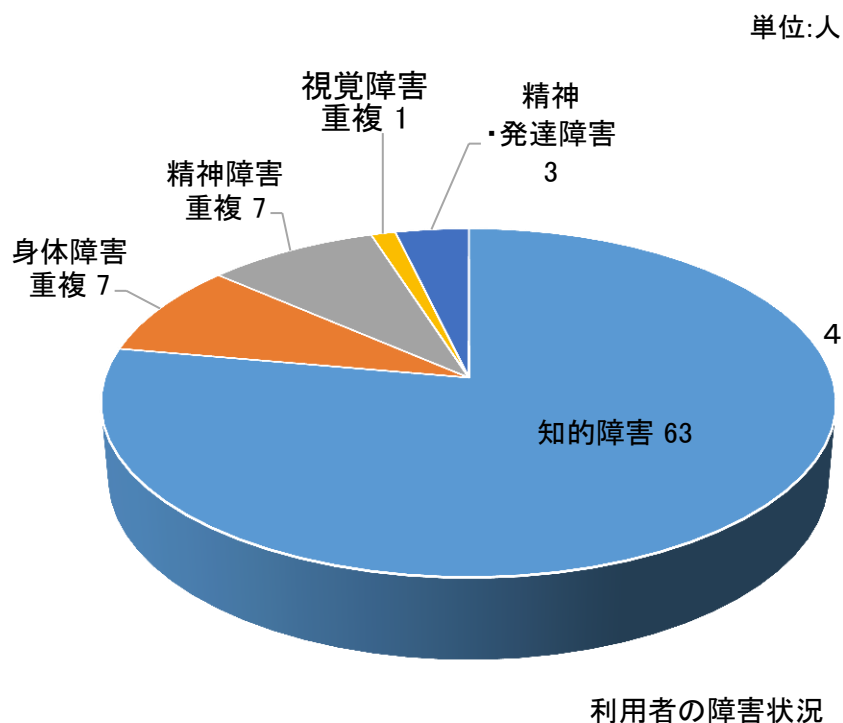
「50代と80代の親子が共に障害を受容できず、福祉サービスを否定的に」

事例4:Dさん

「本人は入所推薦されても入所できず、80代の母親が課題を抱える家族全員に対応」

知的障害分野

(5) 知的障害(障害・年代)

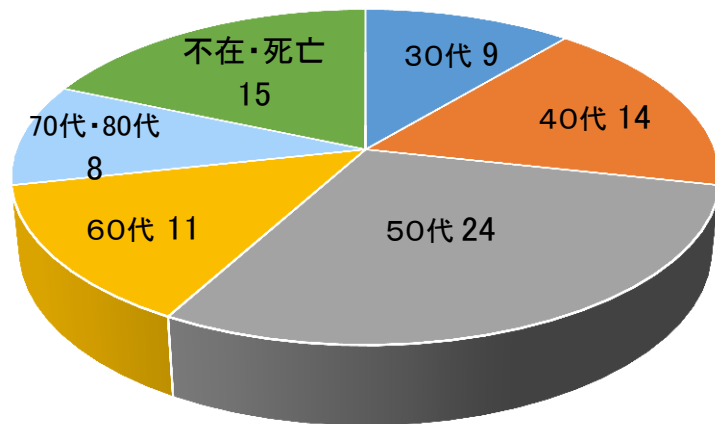


調査:2017年10月

知的障害分野も親の高齢化が進行

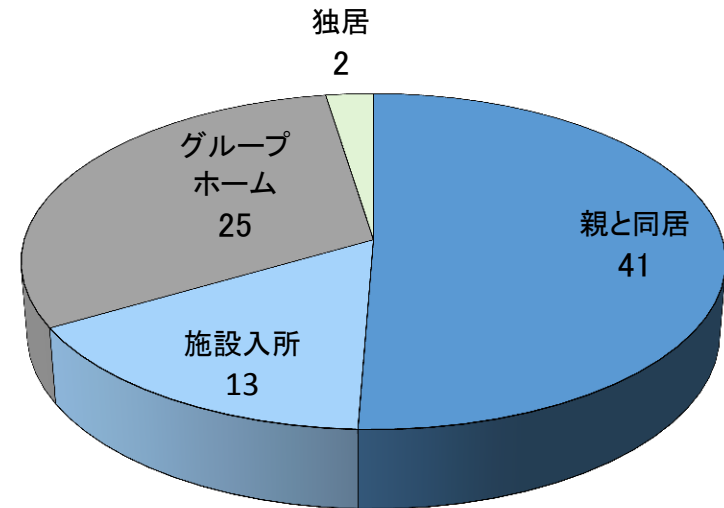
(6) 知的障害(介護者の年代・利用者の居所)

単位:人



介護者の年代

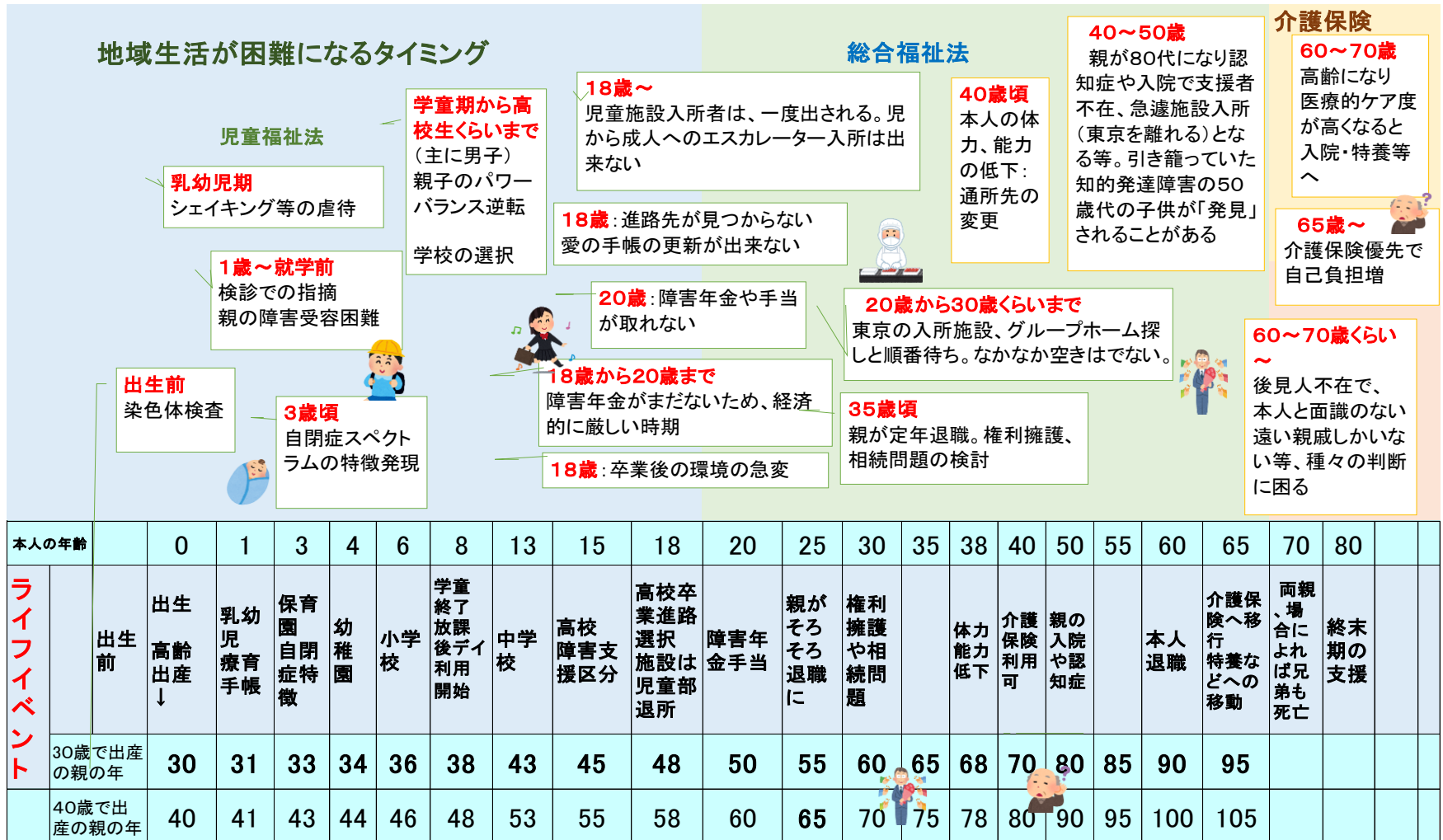
単位:人



利用者の居所

相談支援において留意すべき知的障害を抱える人と親のライフステージ

(7) 知的障害を抱える人の人生・生活の分岐点



.....知的障害分野の事例

現在81名の知的障害者の計画相談を担当

事例1: Eさん

「3人で暮らしていたが、本人以外の2人が相次いで施設入所」

事例2: Fさん

「本人が施設生活を嫌がり、80代の母親は困惑」

事例3: Gさん

「認知症の両親と家事が苦手な本人が困窮の中、同居」

事例4: Hさん

「両親が死亡し、引きこもりの兄と知的障害の本人残される」

3 課題への模索・・・・・・・・・・・・・・・・

(1) 潜在化していた事柄が一挙に噴出した8050問題

- ① 本人と親にとって、抱える課題が解決しないまま最終段階に来てしまった。残された時間は少ない
- ② 本人の重度化と親の高齢化が同時に来る困難さ
- ③ 全般的な支援資源の不足、サービスの自治体間格差

(2) どのようなことが必要なのか？

- ① 寄り添いながら相談が可能なケアコミュニティづくり
- ② 早い段階から種まき、支援サービス利用体験の推進
- ③ 制度・種別を越えた連携・協働の継続支援ネットワーク
- ④ ライフステージに沿った集中的な支援体制の強化
- ⑤ 身近な地域で最重度者を含む生活支援拠点づくり

団塊世代が後期高齢者になるのも
目前……「取り組もう 8050問題」

ご清聴ありがとうございました